

隠岐五箇方言の問いかけ表現法

神 部 宏 泰

五箇方言とは、隠岐島「島後」(隠岐群島中、北部に位置する最大の島を指す。)の北部に位置する、五箇の生活語をいう。小稿では、この五箇方言にみられる「問いかけ表現法」について、記述をすすめることにする。

問いかけの表現は、相手に、何らかの反応・説明を期待する表現から、自問・自疑の表現にいたるまで、幅広く、かつ、そうとうに複雑である。勧誘・依頼・命令・反撥など、他の諸表現とかかわりあう面も大きい。

問いかけの表現を、形式面からみれば、「カ」類、その他の文末詞の立つ場合、疑問詞の立つ場合、文末に、特定の声調の加わる場合——の、おおむね三本の柱をみとめることができる。もとより、これらの諸要素も、現実の相においては、相互に相呼応しておこなわれることも少なくない。

はじめに、文末詞の立つ表現法を中心に、とりあげていくことにしたい。

1. 文末詞の立つ表現

a カ 類

○マタ ボロケタ カ。

また落ちたか。(青男↓小男)

注、話し手が青年男子、聞き手が少年男子であることを示す。以下、この表記法による。なお、聞き手の表記のないものは、すべて筆者が聞き手である。

○フナガ オツ カ。

ふながいるの。(小女↓同)

○カツテ モラッタ カ。

買ってもらったの。(小男↓同)

○フガ ホコツチヨツ カ。

火がおこっている?(老女↓青男)

単純な問いかけの表現である。右は、文末に、「カ」の立つことによって、成り立った表現であるが、また、ここに、「カイ」「カエ」の立つことがある。

○キヨーワ ナンニチ カイ。

今日は何日だい。(老男↓中女)

○ジーサンモ エキタ カイ。

おじいさんも行ったかい。(青男↓中女)

○カズチャンワ エンダ カイ。

かずちゃんは帰ったの。(中女↓小女)

○マダ ガツコー スマン カエ。

まだ学校は終わらないの。(中女↓小女)

○マー エク カエー。

もう行くかい。(中男↓同)

右のように、「カイ」「カエ」の立つ表現は、「カ」の立つそれに比して、親しみがある。「カ」に、改まり・かたさがみとめられるのに対して、「カイ」「カエ」には、気やすさ・やわらかさがみとめられる。例えば、

○ミンナ エカシヤンス カ。

みんないらつしゃいますか。

の「カ」の位置に、「カイ」「カエ」は立ちにくい。「ーシヤンス」のような敬体の叙述下には、「カ」の立つのが自然なのである。

なお、「カイ」「カエ」は、例文にみられるとおり、上昇調子をとっておこなわれることが、比較的多い。

さて、以上にとりあげたものは、単純な問いかけ表現であるが、「カ」類文末詞をとる問いかけ形式のもので、また、次下のような、複雑な表現もみとめられる。ここに、勧誘・依頼・命令その他の諸表現にかかりあう、特殊面が観察される。

○オツツァンニ キーテ ミツ カー。

おじさんに聞いてみる？(小男↓同)

○パーサント アスブ カ。

おばあさんと遊ぶ？(老女↓小女)

これらは、問いかけの形式をとった、勧誘の表現とみることができよう。次下の例文も、また、勧誘表現としてとりあげることができ

る。
○チット トッタテテ シンジンシメーカ。

少しとりたてて信心しようではないか。(癡寺)(老女↓老

男)

○アツチベタエ マワーツテ ミメーカ。

向う側へまわってみようではないか。(中女↓老女)

○オダチテ サケ エツショ カワシメーカ。

おだてて酒を一升買わせようではないか。(中男↓同)

○ヤシヨクニ クイメーカ。

夜食に食べようではないか。(老男↓青男)

これらは、「ーメー」(ーまい)の立つ叙述を、「カ」で統轄、問いかけの表現にしたたものである。特色のある、勧誘の表現となる。

「ーメー」は、いわば、否定の方向の「意志・決意」を表わす。

が、この意をもって立つ「ーメー」は、右のような、問いかけ形式の勧誘表現におこなわれるのが普通である。この表現は、だいた

い、中年層以上に多い。
否認形式をとる叙述を受けて、「カ」類の立つ表現がある。

○ヤラツシャラン カ。

おやりにならないの。(老女)

○エカシヤラン カエ。

いらつしゃらないの。(中女↓老女)

○マー エナツシャラン カノ。

もうお帰りにならない。(中女↓老女)

これも、勧誘または婉曲な命令の表現としてうけとることができ

る。
否認形式をとる叙述を受けて、「カ」類の立つ表現に、また、次

例のようなものがある。

○アケテ ゴサン カ。

開けてくれないか。(小女↓中女)

○チョット フローミテ ゴサン カエ。

ちょっと風呂の湯加減をみてくれない。(青女↓小女)

これらは依頼の表現とみることもできよう。

○ナオツジャラー カ。

なおるだろうか。(青女↓中女)

○シエンシエーウ ウチンジャラー カ。

先生は家にいらっしゃるだろうか。(中女↓青男)

○マダ アツジャラー カ。

まだあるだろうか。(中男↓同)

推量の問いかけ表現である。

推量の問いかけ表現形式をとるもので、さらに、次下のような表現が注意される。

○エチリモ ゴザンショー カ。

一里もございましょうか。(老女↓老男)

独白に近い、疑いの表現である。

○ナンガ ハズカシカラー カナ。

何がはずかしいものか。(小女↓同)

反撥の表現とみることができる。

問いかけの形式をとる反撥の表現としては、なお、次下のようなものがとりあげられる。

○モドラーツ カエ。

帰るもんかい。(中男)

○シラーツ カイ。

知るもんかい。(青男↓同)

○ツマラーツ ケ。

できるもんかい。(青男↓同)

○オラーツ ケー。

いるものかい。(小女↓同)

強い自己主張を、問いかけの、いわゆる反語形式によって表わした、反撥・反抗の表現である。後二例の文末詞「ケ」は、「カイ」から転訛したものである。さて、「ケ」のおこなわれるのは、右の表現の場合に限られる。この点からも、右の「ーツケ」は、反撥の表現形式として、ある程度、慣習化したものとみることができよう。(ちなみに、「ーツケ」の「ツ」は、推量助動詞「ズ」の転訛形である。)全層によくおこなわれる特殊な表現である。

「カ」類は、さらに、次下のように、特殊な問いかけ表現をしたてる。

○コンタ オツタ カノ。

あなた、いたの。(中女↓老女)

○ヨー ゴザツタ カノ。

あら。いらっしゃったの。(老女↓同)

これらは、いずれも、事態を目前にしての問いかけ表現で、聞き手の、反応・説明を期待する面は、比較的うすい。いわば、発見・確認の表現といってもよからうか。

○ムギマキデス カ。

麦まきですか。(中女↓中男・等)

○クサトリ カイ。

草取りかい。(老男↓老女)

○キコリデス カノ。

木こりですか。(中男↓老男)

これも、特定の事態を自ら目撃しての、問いかけ表現である。聞き手の説明を期待する意識は稀薄で、単なるあいさつの表現とみてよい。これを、また、確認の表現とみることもできようか。

○マメニ ゴザンス カ。

お元気でですか。(中女↓同)

○オシマイデ ゴザンス カ。

今晚は。(老女)

○シマワシタ カノ。

今晚は。(中男↓老男)

○ヌクイジャー ネー カ。

暖かいではないか。(中男↓同)

右の表現も、先述したところに類するもので、問いかけ形式による、単なるあいさつの表現とみることができる。

○ソー カノ。

そうかね。(老女↓同)

○ソゲー カ。

そうか。(老男↓青男)

○ソエ カ。

そうか。(青男↓同)

○ホント カノ。

ほんとう？(小女↓中女)

問いかけ形式をとった応答の表現である。いくらかの疑いを含むこともあるが、単なる受け答えである場合が多い。

以上のように、「カ」類の文末詞の立つ問いかけの表現は、複雑な特殊相をみせることが少なくない。

b ヤ

文末詞「ヤ」が立って、問いかけの表現の成り立つことがある。

○ドーチャンワ モツテ エカシタ ヤ。

お父さんは持つて行かれたかい。(中女↓同)

○ドコデ ヤ。

どこで？(小女↓小男)

○ワタシガ ヤ。

私が？(小女↓青女)

○アルイテ ヤ。

歩いてかい。(中女↓老女)

単純な問いかけである。「ヤ」は、先述の「カ」に比べると、品位が下がる。ごく親しい者同士のあいだでおこなわれるもので、くだけた感じをもっている。「カ」に比較すると、使用頻度も低い。

この「ヤ」が、先述の「カ」と複合して成った文末詞に「カヤ」がある。「カヤ」も問いかけの表現をしたてる。

○シエビロ キチヨツタ カヤ。

背広を着ていた？(小女↓中女)

○ノラレツ カヤ。

乗れるの。(小男↓中女)

○エキガ テン カヤ。

空気がもれない？(ボール) (小女↓小男)

○ゴムワ ネー カヤ。

ゴムはないの。(小男↓老女)

「カヤ」は、右の例文にみられるように、普通、上昇調子をとっておこなわれる。このうちでも、特に、後二例にみられる「カヤ」は、特異である。この特異な上昇調子は、実は、一般の問いかけの表現にみられる慣習的なものであって、注目される。

さて、右の「カヤ」による問いかけ表現には、気やすさ・親しさがみとめられる。この点、後述する「カノ」と対照的である。「カノ」には、比較的、改まり・上品さがみとめられる。）

「カヤ」の立つ問いかけ表現は、全層におこなわれるが、特に若い層に多い。

c ノ・ナ

文末詞「ノ」および「ナ」が立って、問いかけの表現の成立することがある。

○エツ エカシャル ノ。

いついらっしやるの。(小男)

○アノタガタ ドコノ ガツコーデスノ。

あなたはどこの学校ですの。(老女)

○ドコ エカシャル ナ。

どこへいらっしやるの。(中女↓青男)

右のように、「ノ」「ナ」は、疑問詞と呼応しておこなわれるのが普通である。が、使用頻度は低い。

「ノ」と「ナ」とでは、「ノ」の方が上品である。この用法に立つ場合に限っていえば、「ノ」の方が、使用頻度もやや高い。いずれも、単純な問いかけ表現をしたてる。

さて、右の「ノ」が「カ」と複合して成った文末詞に、「カノ」がある。これも問いかけ表現に立ち、日常頻用されている。

○バーサン。モモガ アツ カノ。

おばあさん。桃があるの。(小女↓老女)

○ナシモ アツ カノ。

梨もあるの。(中女↓老女)

○マー デタ カノ。

もう出たの。(青女↓小男)

○ルスデス カノ。

留守ですか。(中女↓老女)

いずれも、単純な問いかけ表現である。

「カノ」は、かなり上品である。「カ」「ノ」それぞれも、比較的上品であることは、先述したとおりである。ここで注意されるのは、「カノ」の頻用されるのに比して、「カナ」がほとんどおこなわれないということである。この事態も、「ナ」の示す、品位の低さに関連するものと思われる。

「カノ」の立つ表現は、女性におこなわれることが多い。

d ン

文末詞「ン」が立って、問いかけの表現の成り立つことがある。

○ドコノ クサトリニ エクン。

どこの草取りに行くの。(中女↓小女)

○ドコデ キツタ ン。

どこで切ったの。(小女↓中女)

「ン」は、右の例文のとおり、疑問詞と呼応して用いられるのが普通である。この種の問いかけ表現は、まれにしかおこなわれない。主として、女性にみられる。

e タ

文末詞「ダ」が立って、問いかけの表現の成り立つことがある。

○ナニ エツチヨルダ。

何を言っているの。(老女↓小男)

○ナン スツ ダー。

なにをするの。(小男↓同)

○ドゲ スツ ダ。コレ。

どうするの。これ。(小女↓同)

○ナケラニヤ ドガ スツダ。

なかったらどうするの。(青女↓老男)

「ダ」は、疑問詞と呼応して、問いかけの表現に立つ。「ダ」には、判断・主張の感情の托されるのが普通で、特定の場面にあつては、右の形式による表現が、いわば詰問の表現となることもある。「ダ」の立つ表現は、概して下品である。全層にわたって、ひろくおこなわれる。

「ダ」が、先述の「カ」と複合して成った文末詞に、「ダカ」がある。この「ダカ」も、問いかけの表現をしたてる。

○コンヤ エク ダカ。

今夜行くの。(中女↓中男)

○バンニ モドツ ダカ。

晩に帰るの。(中女↓同)

○カヨ ー ダカ。

通うの。「通学」(小女↓同)

○スモ ー スツ ダカ。

相撲をするの。(小男↓同)

以上のように、「ダカ」は、「ダ」の立つ表現の場合と異なつて、

疑問詞を伴わないで用いられる。だいたい、「ーのか」の意味に近い。全層にわたつておこなわれる。

f カ(ガ)

文末詞「カ」(ガ)が立って、問いかけの表現の成り立つことがある。

○エンピツ アラーカ。

鉛筆があるだろう。(老女↓小男)

○スルメジャラーガ。

するめだろう。(小女↓中女)

○キョー エキヤー スメーカ。

今日行かないだろう。(中男↓同)

○クラカラ ーカ。

暗いだろう。(中男↓老男)

推量の問いかけ表現である。「カ」は、例文のように、推量の叙述を受けておこなわれるのが普通で、他の形式に関連して問いかけ表現に立つことはない。この「カ」の立つ表現は、先述の「カ」などの立つ場合と違つて、話し手の判断を、聞き手の意図に意を払いながら、もちかけるおもむきのものである。その意味で、聞き手の、同意・確認を期待する、特殊な問いかけ表現ということもできよう。

右の「カ」が、先述の「ナ」「ヤ」と複合して成った文末詞に、「カ(ガ)ナ」「カ(ガ)ヤ」がある。この文末詞も、特殊な問いかけ表現をしたてる。

○カミカ アラーカナ。

紙があるだろう。(中女↓小女)

○カベヤナンド オチマジョーカヤ。

壁など落ちましようね。(老男)

この問いかけ表現も、基本的には、先述の「カ」による表現の場合と、ほぼ同様の機能をみせる。つまり、話し手の判断をもちかけ、その、同意・確認を期待する、特殊な問いかけの表現として存立しているのである。

2、疑問詞の立つ表現

疑問詞によって、問いかけ表現の成り立つことが多い。その疑問詞が、「カ」など、特定の文末詞と呼応しておこなわれる表現は、すでに、先項でもとりあげてきた。事実、疑問詞は、文表現の末尾に位置する、特定の文末詞と共に用いられることが少なくない。

○ナンゾ クツチヨツカ。

何か食べているの。(小女↓同)

○ナンゾ ヨージカノ。

何か用事ですか。(青男↓中男)

○ドケ エッタ カイ。

どう言ったかい。(老男↓中男)

右のように、疑問詞は、文末詞「カ」類と呼応しておこなわれることが最も多い。

次下の例文のように、疑問詞が、文末詞「ノ」「ナ」「ン」「ダ」などと、呼応して立つ問いかけ表現も注目される。

○ドケ ノー。

どうかね。(中男↓同)

○ドコ エカシヤルナ。

どこへいらっしやるの。(中女↓青男)

○ドコデ キツタン。

どこで切ったの。(小女↓中女)

○ナニ スルダ。

何をするの。(老女↓小男)

右の例文にみられる文末詞は、疑問詞と呼応して問いかけ表現に立つのが普通である。単独で、問いかけ表現を成り立たせることはない。

疑問詞をとる表現は、文末詞が立たなくても、問いかけの表現となるのが一般である。

○ドケ エク。

どこへ行くの。(老女↓中女)

○ドコ エカシタ。ジーサン。

どこへいらっしやった。おじいさん。(老女↓老男)

○タエカ シタ。

誰がしたんだ。(中男↓同)

○ナシエ ハダンデキタ。

なぜはだして来たの。(小女↓同)

○ドコウマレダ。

どこの生まれだ。(老男↓青男)

右の例文のように、疑問詞をとる問いかけ表現は、末尾で、上昇調子をとらないことが多い。いずれも単純な問いかけである。

○エツ エヌツジャラー。

いつ帰るのだろう。(小男)

○ドイッソ フンダラー。

どの方だろう。(青女↓小男)

推量の問いかけ表現である。

疑問詞を含む語部が、そのまま問いかけ表現に立つことがある。

○ドコカラ

どこからへ来た。 (青女↓少女)

○ドコノ

どこのへ犬。 (小男↓青女)

○エツゴロ

いつ頃。 (小男↓同)

○ドゲ

どうだって。 (老女↓小男)

○ナシエ

なぜ。 (老男↓同)

親しい者同士のあいだで交される、単純な問いかけである。

3、文末声調による表現

問いかけの表現は、文末に加えられる、特定の声調によっても成り立つ。

○エモ コス

来られないって。 (小男↓同)

○フトニ ヤッター

人にやったって。 (小男↓同)

○エンピツガ アル

鉛筆があるの。 (小男↓老女)

疑問詞および文末詞のない問いかけ表現の文末では、例文のとおり、上昇調子をとるのが普通である。

○アスコニ アツタジャラー

あそこにあっただろう。 (老女↓小男)

○ハイチョーダラー ミシンイトガ

入っているだろう。 ミシン糸が。 (青女↓少女)

推量の問いかけ表現である。ここでも、文末で、上昇調子をとっているのが注意される。述部に、活用語の「推量形」をもつこの表現は、例えば「マダ アツジャラー カ」(まだあるだろうか。)など、文末に「カ」をとる表現とは異なっており、話し手の、一定の判断・推定をもちかけ、その同意を期待するおもむきのものである。その意味では、また、特殊な問いかけ表現とすることができよう。文末の上昇調子は、もとより、「カ」などの文末詞をとる表現にもみられる。例えば、次下のとおりである。

○オテラワ インドカラ ハジマッタデス カイ

お寺は印度から始まったんですか。 (老女)

○マー エク カエ

もう行くかい。 (中男↓同)

○フロカラ アガツテカラ ホント オシエテ ゴス カヤ

風呂からあがってから、ほんとうに教えてくれるね。

(小女↓同)

○オマエタチャー ソコー ホツテ ナンゾ デマス カノ

あなたたちはそこを掘って、何か出ますかね。

(老女↓中男・等)

以上のような上昇調子のうちで、「しカエ」「しカヤ」「あるいは先述の「しヤッター」などのような「し○○」調のものは、念おしの心意を表わしたものである。慣習的な声調であって注目される。

以上、五箇方言の問いかけ表現法について記述した。

対話の生活にあつて、相手の反応・説明を求める問いかけの表現は、基本的に、表現活動の重要な部分を占めているといえよう。現前の聞き手への、直接的なもちかけ・問いかけには、特別な待遇心が動く。表現は、おのずからに、豊かな陰影を帯びてくる。このことが、また、すでにみてきたとおり、勧誘・依頼・命令・反撥など、諸他の表現に、深いかかわりをもつゆえんでもある。

問いかけ表現法の討究は、隠岐の、方言表現法を体系的に把握するうえ、重要な作業といえよう。

(本学助教授)